

第 3 表 分散分析表

変 動 因	自 由 度	平 方 和	平 均 平 方	F
反 復	1	33.07	33.07	6.95**
S = 植 栽 方 式	5	19.39	3.88	0.82
P = 上、中、下	2	48.93	24.47	5.14**
S・P	10	83.01	8.30	1.74
誤 差	17	80.88	4.76	
Total	35	265.28	—	

38. 生 椎 茸 の 価 格 変 動 分 析

九 大 吉 良 今 朝 芳

I 研究の目的

生椎茸の生産は近時全国的に普及し、その生産量は飛躍的にのびてきているが、一方椎茸の価格は野菜と同じように一般的に変動が激しいものと見做されている。そのため今後の需給関係で一つの問題となっている。そこでこの生椎茸の価格変動の要因を統計的手法をもちいて分析し考察することをこの研究の目的とする。

II 分析の資料

分析の対象地域として福岡、大阪、東京を選んだ。当該地域の生椎茸の需要および供給量ならびに価格を示す資料として福岡、大阪、東京の各中央卸売市場が集計した月次別入荷量調べを用いた。

また月次別資料は昭和36年から昭和39年までの4カ年間について利用した。これらの資料からえた数値は第1表、第2表のとおりである。さらに年次別資料は

第 1 表 年 度 別 月 別 平 均 価 格

		単位 円											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
福 岡	36	264	222	330	402	263	167	220	234	329	356	239	195
	37	203	248	396	285	196	143	179	239	327	300	363	230
	38	170	307	172	207	296	219	162	283	296	222	297	304
	39	177	288	269	477	504	335	276	511	508	659	416	523
大 阪	36	184	289	295	280	228	191	339	251	383	337	260	299
	37	249	309	388	233	282	263	274	314	343	412	316	309
	38	189	379	299	250	264	200	252	315	296	253	353	338
	39	182	356	356	351	270	310	270					
東 京	36	233	344	355	382	285	320	329	362	360	241	227	243
	37	234	279	322	271	236	272	278	333	316	301	268	286
	38	208	329	275	301	294	268	259	368	373	290	313	293
	39	188	397	404	530	463	354	299	469	373	311	298	386

第 2 表 年 度 別 月 別 入 荷 量

単位 100Kg

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
福	36	69	41	13	7	12	48	42	39	66	44	77	150
	37	108	47	13	13	32	73	100	73	86	58	48	111
	38	165	25	40	23	20	52	123	78	114	101	88	110
	39	84	27	25	9	8	34	70	40	70	34	71	66
大	36	413	148	73	64	81	200	141	270	518	498	685	626
	37	550	202	86	119	75	159	391	523	795	584	709	748
	38	866	169	160	180	189	506	434	713	1,045	1,078	864	880
	39	725	211	204	201	749	466	749					
東	36	2,272	986	458	274	497	693	1,011	969	1,975	2,937	3,237	3,799
	37	2,979	1,698	776	610	777	1,184	2,207	1,973	3,276	3,111	3,803	4,384
	38	4,257	1,883	1,086	759	912	2,170	2,919	2,657	3,806	4,379	4,685	5,548
	39	5,534	1,550	1,062	549	627	2,195	4,109	2,800	5,573	5,632	6,107	6,287

第 3 表 年 度 別 月 別 価 格 変 動 率

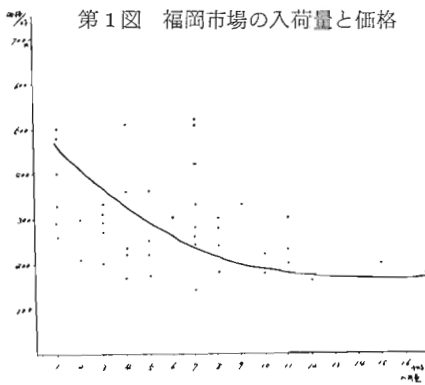
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
福	36	—	84	148	122	66	64	132	106	141	108	67	82
	37	104	122	159	72	69	73	125	134	137	92	121	63
	38	74	180	56	120	143	74	74	175	105	75	134	102
	39	58	163	94	177	106	66	82	185	99	180	63	126
大	36	—	157	103	95	81	84	177	74	153	88	77	115
	37	120	124	126	60	121	93	104	115	109	120	77	98
	38	61	201	79	84	106	76	126	125	94	86	140	96
	39	54	196	100	99	77	115	87					
東	36	—	148	103	108	75	112	103	110	100	67	94	107
	37	96	119	116	84	87	115	102	120	95	95	89	107
	38	73	158	84	110	98	91	97	142	102	78	108	94
	39	64	210	102	131	87	76	85	157	79	84	96	130

第 4 表 年 度 別 月 別 入 荷 変 動 率

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
福	36	—	60	32	55	161	410	89	93	168	67	173	194
	37	72	44	27	105	241	230	137	73	118	67	83	232
	38	149	15	159	57	89	254	238	64	145	89	87	125
	39	76	32	95	36	90	42	203	57	176	48	209	93
大	36	—	36	49	89	126	246	71	191	140	96	138	91
	37	88	37	43	137	64	211	246	134	152	74	121	106
	38	116	196	95	112	105	268	86	164	147	103	80	102
	39	82	29	97	99	373	62	161					
東	36	—	43	46	60	181	140	146	96	204	149	110	117
	37	78	57	46	79	127	152	187	89	166	95	122	115
	38	97	44	58	70	120	238	135	91	143	115	107	118
	39	100	28	69	52	114	350	187	68	199	101	108	103

第 5 表 年次別市場別平均価格および変動率

		A : 平均価格 B : 変動率											
		28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
福 岡	A	—	—	—	—	—	—	—	283	225	240	237	392
	B	—	—	—	—	—	—	—	—	80	107	99	165
大 阪	A	—	—	—	290	252	245	242	266	286	297	287	—
	B	—	—	—	—	87	97	99	110	108	104	97	—
東 京	A	196	225	253	241	272	268	262	259	283	266	291	322
	B	—	115	113	95	113	99	98	99	109	94	110	111



昭和28年から昭和39年までの12カ年について第5表に示した。

III 分析の方法

第1表の月次別価格をもとにして Link-Relative

method によって価格変動率を算出すると第3表のとおりとなる。また同じように第2表から入荷変動率を算出したものが第4表である。さらに第2表、第3表から第1図を作製した。

IV 分析および考察

第3表、第4表に示された福岡、大阪、東京それぞれにおける価格変動率の間に有意の差があるかどうか、また月次間に有意の差があるかどうかを検討した結果、三つの市場における価格変動および入荷変動の間には有意の差 ($F=0.584$) は統計上認められなかった。つぎに月次間について同様に価格変動および入荷変動についてみると高い有意の差 ($F=3.262^{**}$) が認められた。

そこでつぎに月次間の有意差の要因をみるために第1図の入荷量と価格の関係をみると、入荷量が増加するにしたがって価格が低下するという一般的な供給曲線がえがかれた。

39. 農家林業の経営について (I)

山村集落の分析

宮崎大学農学部 三 善 正 市

まえがき

さきに農林漁業基本問題調査会から答申された「林業基本問題と基本対策」によって、家族経営的林業の地位をわが国の林業生産の担い手として従来より高め、合理的な経営規模を保有した家族経営の形成を推

進すべきであることがうたわれた。ことに林業生産の担い手としての適格性、経営の適正規模等についていろいろな論議がかわされ、昨年成立した林業基本法にもとづいて本年度より林業構造改善事業が進められている。

従来農家林の大部分は歴史的な過程によってほとん